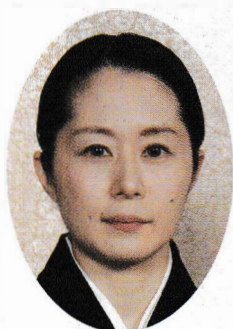


招待席

広島と能楽

喜多流能楽師 大島衣恵



〈筆者紹介〉

シテ方喜多流能楽師 (社)能楽協会
会員 東京芸術大学音楽学部
邦楽科卒業

祖父・久見、父・政允(共に能楽
喜多流職分、国指定重要無形文
化財保持者)に師事し、2歳で鞍
馬天狗の稚児にて初舞台。広島
県福山市の喜多流大島能楽堂を
中心に能楽の演能、普及活動に

努めている。

2007年広島県教育奨励賞、2010年広島国際文化財団 国際
交流奨励賞、2018年広島文化賞
エリザベト音楽大学非常勤講師

能は室町時代、観阿弥・世阿弥父子を中心に大成され武家社会とともに発展、江戸時代には武家式楽として全国に普及しました。城下町には能があるという時代が約300年続いたのです。広島も福島正則から浅野家の時代を通して、能楽が盛んな土地柄でした。現在の平和公園、原爆ドームのあたりが昭和20年までは猿楽町という町名だったことから広島で能楽が愛好されていた事が分かります。江戸時代まで能狂言は猿楽の能といわれており、猿楽町は能役者たちの住まう地域だったのです。

広島市内にはその他にも能に因んだ場所がいくつもあります。現在もその名が残る相生橋は能「高砂」のテーマである相生の松に由来しており、羽衣町は能の演目、約200曲中最も上演回数の多い「羽衣」の題名そのままの名です。

また宮島での能の歴史は江戸時代以前に遡ります。毛利元就が浜の中に仮設の舞台を建てて一日九番もの演能会を催していた記録が残っています。また当時から都の能役者を指

南役として呼び寄せ、島民が稽古に励み祭事で能を務めていたようです。巖島神社には浅野家の時代1605年に創建された能舞台が現存し、毎年春の桃花祭で御神能が催されています。約300年以上の伝統を持ち、三日間に渡る正式な五番立の番組で能を上演しているのは全国的にも類を見ないことです。

能を愛好した武士は多く、特に豊臣秀吉は能狂いといわれたほどでした。九州名護屋城に組み立て式能舞台を持ち運んで戦の合間に稽古に励み、自ら何番もの能を舞った記録が残っています。秀吉ゆかりの能舞台は400年前、福山初代藩主の水野勝成が福山城築城に際して譲り受け、三代藩主の時代に鞆浦の沼名前神社に据え置かれて現在に至っています。

織田信長が「敦盛」を謡い舞ったエピソードは有名です。皆様もご存知の「人間五十年」は幸若舞という芸能の謡なのですが、いずれにせよ戦を目前にして歌舞を稽古したのは何故だったのでしょうか。

謡には丹田(へそ下三寸あたりの腹の奥)からの深い呼吸が欠かせません。舞の構えや足の運びは体幹の強さと精神の集中を必要とします。戦という最もストレスのかかる場へ向かうために、謡や舞による心身の鍛錬を重ねていたのではないかと、という見方もあるのです。

また能には亡者の魂が在りし日の姿で現れ、弔いに感謝して成仏するという構成の演目が多くあります。常に死と隣り合わせで生きていた武士の心に、鎮魂を謡う能の世界観が響いたのでしょう。能の大成者世阿弥は平家物語などを原典に、亡者を弔う曲を数多く



作りました。同時に日本各地の神々が姿を現してこの世の平和と繁栄を祈り、人々に寿福を与える祝祭の能も作っています。観阿弥・世阿弥の時代から約700年の間、能は鎮魂と祝祭の芸能としてあり続けているのです。

令和3年11月、原爆ドーム前に設えた舞台上で演能する機会に恵まれました。元の猿楽町で生まれ育った方の生涯をかけての願いで、原爆により亡くなった方々の御霊に捧げる鎮魂のための演能でした。私は羽衣のシテ、天女

の役を務めさせて頂きました。羽衣を取り戻した天女が、人々に多くの恵みを与えながら月の世界へと舞い上ってゆく祝福に満ちた能です。能面を通して原爆ドームの姿が目に映った時、言葉に出来ない思いが胸に込み上げ、只々亡き方々のご冥福と世の平和を祈る気持ちで舞い納めました。世の中がどんなに変化しても人々の平和への願いは変わりません。その心を一つ一つの能に込めて舞い続けたいと思っています。

